

第5回 日文研フォーラム

■
日本陽明学の一断面

—大塩平八郎研究の問題点—

Some Problems in the Studies of Ōshio Heihachirō

■
宋 彙七
Song Whi-chil

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛

● テーマ ●

日本陽明学の一断面

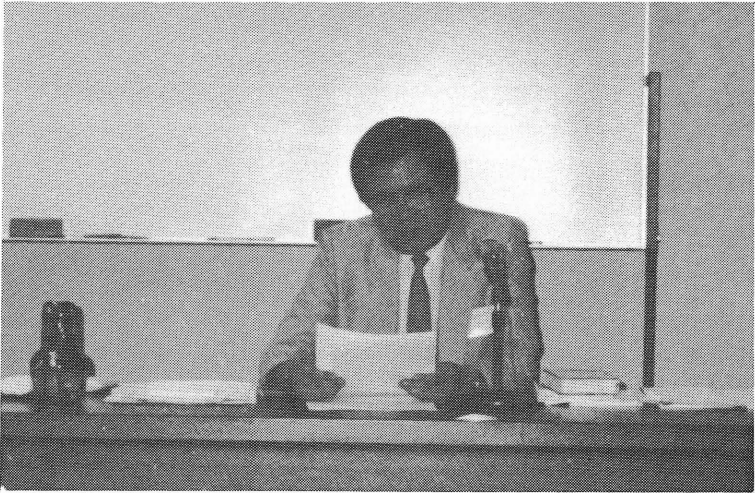
大塩平八郎研究の問題点

Some Problems in the Studies of Oshio Heihachiro

● 発表者 ●

宋 彙 七

Song Whi-chil



発表者紹介

宋 豪 七

Song Whi-chil

韓国慶北大学校師範大学副教授
京都大学人文科学研究所招聘外国人学者

1942年韓国慶尚北道生まれ、1970年韓国高麗大学
哲学科卒業 (B.A.)、1972年高麗大学大学院政治学
科卒業 (M.A.)、1972～4年早稲田大学留学 (研究
生)、1975～82年米国University of Southern
California 留学 (M.A., Ph.D.) 政治思想史専攻、
1982～現在 韓国慶北大学助教授、副教授、1987～
8年京都大学人文科学研究所 Visiting Scholar
(Japan Foundation Fellow)、
1983年以来、韓国司法考 試委員、大学入学学力
考 試委員等歴任

主要論文 (日本関係)

- Yomeigaku as a Philosophy of Action in
Tokugawa Japan (Ph.D. Dissertation,
1982年2月)
- Wang Yang-Ming Philosophy in Action
(Journal of Humanities & Social Sciences
No. 58、1983年12月)
- Philosophical Nature of Yangmyonghak
(「現代と宗教」第7輯、1984年2月)
- Neo-Confucianism and Politics in Tokugawa
Japan (「現代と宗教」第8輯、1985年2月)
- Ultra-right movement in post-war Japan
(「慶北大論文集」第35輯、1983年8月)

はじめに

大塩平八郎研究の問題点は、一言でいうと、大塩の思想とその行動が別々に論じられてきたというところにあります。要するに大塩は思想家としての確に評価されてないと思いますので、その思想が彼の起こした乱とどういうふうに結びれているかという点にポイントを合せて話したいと思います。彼の思想体系はいろんな方が詳しい論理的な分析をして来まして、例えば最近「日本思想史研究」に発表している荻生茂博さんの論文は、大塩の思想が陽明学だというのは相当の問題があり、却って明時代の東林学派の流れを継承していると論じています。そうした思想の分析は、ある意味では大塩平八郎が考えた以上に彼の思想を体系化しているかも知れませんが、それが彼の行動とどういうふうに結びれているかという点についてはまだまだだという感じですよ。

精神分析学的理論の適用問題

大塩という人間と大塩の乱に関する多様な視点として、これまでの論争点を列挙しますと、一番に「大塩は精神病の犠牲者であった」という半谷二郎氏の書いた『大塩平八郎、その性格と状況』が挙げられます。この方はもともと精神病理

学者なんですけど、所謂フロイト心理学を応用して、大塩という人を精神的な病気の犠牲者であったと書いております。一九五〇年代後半から、アメリカではフロイト心理学を応用していろんな学問的な成果があったんですけど、最近では政治心理・歴史心理・経済心理といったいろんな形で心理学が人文社会科学研究の方法として利用されています。例えばエリクソンという人は一九五八年ごろ、宗教改革者として有名なマルチン・ルターのことを分析して、ルターは信念を持って一生を宗教改革にささげた英雄ではなく、小さい時にお父さんが凄く乱暴な人で、ちょっとしたことでも自分をぶったり蹴ったりするので、その抑圧された心理が深く暗い意識として残り、それが特定の歴史的な状況にぶつかって暴発し英雄になったと。もし違った状況なら反逆者にもなり得たという、そういう立場で『ヨンメン・ルータ』という本を書いたのです。それで凄く人気者になって、著作大賞を受けたんですが、その後、今度はインドのマハトマ・ガンディーのことを、やっぱり精神病理学的な分析の仕方を書いて、また著作大賞を貰います。そして次にはアメリカの四大大統領の一人としてあげられているトーマス・ジェファソンの一生を同じ方法で研究しようとしたのですが、トーマス・ジェファソン・ファウンデーションでそれを聞いて、それは困ると思ったのでしよう、そこで

エリクソンに研究費をあげながら、トーマス・ジェファースンのパーソナリティを精神病理学的に研究することを牽制したのです。その効果があったのか、本が出た時にはトーマス・ジェファースンという名前を題に出でこず、『ライフ・ヒストリー・アンド・ヒストリカル・モメント』となっていました。それには賞は与えられなかったのですが、何故こういう話をするかという点、要するに経済心理・政治心理・社会心理・歴史心理というのは成り立つんでしょうけど、思想心理ということになったらとても困るんです。思想家の行動を心理的な刺激に対する反応としてその行動を分析するとしたら、思想そのものがなくなるんですね。思想を簡単に特定な人のパーソナリティの問題として分析したら、研究方法としてはとても問題があると思います。とにかく大塩を完全に精神病者として心理学的に分析するところには方法論として、まず問題があると思います。

思想と乱は関係がないという立場

二番目に、徳富蘇峰は五十冊の長い『大日本国民史』の中で、大塩平八郎について約二五〇ページぐらい書いてますけれども、そこで蘇峰は大塩の乱が彼の性格・病気・状況の産物であったと述べています。まず私も感じたんですけど、大

塩平八郎には間違ひなく潔癖性がある。ある意味で大塩は、ニーチェが言ってるアポロ的な合理的なパーソナリティというよりは、ディオニソス的なパトス的なパーソナリティを持っていて人であったと言えます。しかし、その性格によって偶発的に乱を起こしたというのは、それはあまりにも簡単な見方じゃないかと思えます。それに蘇峰も大塩には氣違ひの病氣があったというふうに言っているし、さらに加えて彼の起こした乱は、状況の産物であったと言うのです。大塩が三十七か八歳頃、寄力としても学者としても随分評判が高く、江戸幕府までその名前が知られていました。そして丁度その頃、大坂東町奉行で大塩を深く信賴した矢部さんが江戸幕府に転職されたので、大塩が江戸幕府の高いポジションに榮転するだろうという噂があったようです。ところが結局それが噂に終わって、その後老中水野忠邦の弟である跡部という人が東町奉行として来てからは、大塩の江戸幕府の官吏になる期待が完全に断られたのです。大塩はそれに腹を立てて乱を起こした、と蘇峰は言うのです。勿論、蘇峰も大塩の思想を高く評価しませんが、その思想と乱は全く関係がないんだという立場をとっております。

民権運動家として評価する立場

三番目の大塩像は民権運動の先駆者であったという、明治初期の自由民権運動の人達の説です。しかし当時の自由民権運動は士族民権運動だという非難もありまして、少なくとも初めの頃は、本当の意味での自由民権思想を持っていたといえないですね。明治十四、五年頃になって、中江兆民らが民主主義的な理論で武装していくんですけど、初めは民主主義とは何かということも分からなくて、例えば「民撰議員建白書」には「士族」と「金持ちの豪農・豪商」だけが選挙権を持つべきだと書いているところがあるくらいです。そして、自由民権運動の「先駆者」ということになりまして、大塩平八郎はプロ幕府の人物であったか、アンティ幕府の人物であったかという論点にまきこまれるんですが、私は飽くまでも大塩は幕府の官吏であり、封建主義体制の中での、改革主義者であったと思います。だから、政治闘争で権力をとろうという民権運動と、檄文で「われわれは絶対権力をとるために乱を起こすものではない」とはっきり意思表示をしている大塩とは、直接的な共通性はないと私は思います。

プロレタリア階級の闘士であったという立場

四番目に、大塩の乱は最初の偉大なるプロレタリア階級闘争であったという見

方です。大塩が面白いのは、左翼からも右翼からも自分達の先駆的な思想家であったと言われることで、そういう面ではほんとに偉いと思いますけれども、どうもプロレタリア階級闘争というと、大塩はどう見てもプロレタリア階級ではないし、大塩が塾で教えていた陽明学というものは四民平等の無階級論理で、農民や庶民の子ども、侍の子ども、誰でも入れて勉強させていましたから、それをプロレタリア的なイデオロギとしてみるのも問題があります。彼の乱に参加した人の中には、侍階級が十二人、農民が十一人、医者が一人、お坊さんが一人という、その成員からいっても、プロレタリア闘争とは言えないのです。

これとは反対に、大塩は飽くまでも封建体制の支持者であったとする、岡本良一さんと前田一郎さんの考え方があります。要するに市政を改革しようとするリフォーミストであったという話ですね。特に岡本良一さんの本『大塩平八郎』は、私はたいへんスタンダードな本だと思えますけれども、しかし大塩の思想であった陽明学とその乱を結びつけるところにはもの足りない感じがします。

反封建的な革命家であったという立場

五番目に、大塩の乱の反封建性、革命性を認めるべきだという、佐野学さんや

羽仁五郎さん等の、民衆史グループの見方があります。一九五〇年代後半から六〇年代までの所謂民衆史グループの大塩に関する関心はすごく高くて、大塩の乱が反封建的であったとか、革命的であったと主張したのですが、これに対して大塩は体制内での改革主義者だったという岡本良一さんの批判があたっている、と私は思います。阿部真琴さんは、岡本さんの批判を率直に取り入れて、「革命性」という言葉を「改革性」と変えて行ったので、このカテゴリーに入れるにはちょっと問題があるんですけど、とにかく大塩の乱を革命だったと、それも左翼の立場で見る反体制、反封建的革命だったというのには問題が多いと思います。まず唯物史観的な歴史研究で大塩の乱を見た場合、歴史を物質的な発展過程として見られるかという問題と、大塩の乱がその発展のある段階で必然的におきた革命であったと説明できるかという問題が出て来ます。しかしこの二つ、どっちにしても問題があると思います。中国では、戦前まで気の哲学を唯物論に結び付けて、例えば張載の太虚論、あるいは気論とか清時代の載震などを、全部併せて唯物論者として取り扱ってきたんですけど、戦後は相当違った評価が出ています。また、チャロトプスキーというソヴェエトの人が、日本の徳川時代の唯物論者としてこの大塩平八郎をあげております。貝原益軒もそこへ入れてますし、伊藤仁斎も入

れております。一方、イギリスの経験主義をマルクス主義者たちは唯物論として取り扱っています。ベーコンからの流れが自然科学を前提にして研究する仕方ですから、それには相当の根拠があります。しかし、東洋の気の哲学を唯物論として見做そうとしたら、簡単じゃないんです。陽明学も大きい流れの中では気の哲学ですが、あの内面的、直観的な思想体系を唯物論と見做すにはあまりにも無理があります。

尊皇攘夷の先駆者であったという立場

六番目に、大塩の乱は尊皇攘夷運動の先駆的イベントであったという主張があります。それにはナジタ・テツオさんがアメリカで英語で書いた「大塩平八郎」という論文と、アイヴァン・モリスが「失敗した人の崇高な精神」というタイトルで書いた本の中に大塩に関する論文がありますが、ナジタさんは大塩の檄文から「天照大御神」という言葉を取り出して大塩が本居宣長とか国学的なシントイズムと意識を共にしていると言ってるんですけど、檄文の中の一節を以て大塩のユートピアを簡単に決めつけるには問題があります。儒学でのユートピアは堯・舜といった古代の聖人たちからアイデアル・ステイトをもとめて、その後夏・殷

・周と続きますが、それらはプレ・ヒストリーの時代です。この時代は大抵、天下は全て公の物で、個人所有ではない。年中春で、果物が落ちるとそれを食べればいつも満腹である。しかし人間の智慧が発達して、どんどん悪くなり、礼楽が必要になってくるのです。しかし大塩平八郎のユートピアン・ソサエティはこの礼楽そのものじゃなくて、聖人たちのモラル・プリンシプル、すなわち徳治主義を現代に発展させようという、そういう理想主義です。大塩平八郎の『古本大学刮目』とか『洗心洞割記』には天照大御神というような日本のユートピアン・ソサエティに関する内容はほとんど出てこないんです。確かに檄文の一節には、天照大御神から始まって神武天皇の話が出てくるんですけど、それだけで大塩の思想と尊皇論を結び付けるには大いに問題があります。ナジタさんは、大塩平八郎が死んで二年目の三月二十七日に、水戸の斉昭が自分の家来達を集めて、「大塩を考えると涙が出る。生活を質素にしなさい」と訓話をしたという話と、その人が徳川幕府改革の建白書を出したりした尊皇攘夷運動のリーダーの一人であったことから、尊皇攘夷運動の先駆的な人としての大塩像を考えたいと思いますけど、これには相当な問題があると思います。

三島由起夫の大塩像

大塩は乱を起こして四十五歳で死にましたが、三島由起夫は四十六歳で切腹するんです。彼は大塩の歳で死にたかったし、大塩の死んだ日に自分も死にたかった人です。その三島が大塩の陽明学は革命の哲学だと言う時、思想というものはある場合には革命的にもなり、ある場合には保守的な思想にもなりうるからまず問題があります。政治的な状況とか歴史的ないろんな展開過程で、思想がラディカルにも保守的にもなりうるという理論は、マックス・ウェーバーも『職業としての政治』で言っているものですが、政治家が社会のいろんな問題を改革できると考えている時は責任倫理に立っているが、いくら戦っても仕方がないと自覚した時には、それが心情倫理になり、破壊的にもなりうるという話です。だから、ある思想を状況と無関係に、革命の思想だと言うことは、簡単には合理化できるものではないと私は思います。

三島由起夫はもう一つ、大塩平八郎は所謂日本精神、大和魂のシンボルだと主張するんですけど、大塩の陽明学は朱子学よりも民族主義的な色彩が薄いのです。朱子学には強いナショナリスティックな論理が含まれてますけれども、陽明学の方はより普遍的な世界主義的要素が強いと私は思います。

陽明学の性格について

では、陽明学はどういう思想であるか？ その性格に関して簡単に話したいと思います。まず名古屋大学の山下先生は、陽明学を宗教的に見ています。古代の孔子・孟子の先秦儒学は天という一つの神を考えるので、一神論的ということになり、朱子学の神に関する観点は理神論的だということです。そして陽明学は汎神論的であると言ってますけれど、宗教的に陽明学を説明するには限界があると私は思います。日本に來た陽明学を中江藤樹あたりで見ましたら、相当「宗教的」な性格を持っていると言えるでしょうけど、中国では陽明学が一種の社会運動のイデオロギになるんです。

もう一つは、陽明学はヒューマニズムであると、アメリカのコロンビア大学のテイベリ先生が主張しています。この先生は明末陽明左派の李卓吾をみて人道主義者あるいは博愛主義者であると、そして彼の思想をインディヴィジュアリズムであると言ってますけれども、全くこれは問題があります。西洋のインディヴィジュアリズムを儒学思想に求めると、相当の問題が生じてきます。特に陽明学は理・気の合一、知・行の合一、生・死の合一、自・他の合一、結局万物一体の仁

という理論になっていくんです。だから朱子学・陽明学をインディヴィジュアルイズムというチームで分析することはほとんど出来ないと思います。儒学では個人主義的な要素があってもパーソナリズムとして呼ぶべきものだと思うからです。

もう一つは、政治を通じて明代における近代意識の挫折を見る島田先生の立場で、先生は陽明学が反権威主義であり、自己意識が強かったと、しかしそれが失敗してしまったのは残念だという立場です。

最近私は、陽明学か朱子学かというような対照意識で中国・韓国・日本の儒学思想史を見る労力を放棄しまして、理学か気学か、理が主であるか気が主であるか、という立場で見える方がよほど生産的であると考えるようになっていきます。何かかというのと、気の哲学は人間の欲望を積極的に認めるので、朱子のように「君子・小人」を分ける必要がないし、官僚階級と一般民衆を分ける必要もないんですね。そういう二分法を拒否する、そして社会的には、現状維持の朱子学的な官僚主義に対して、改革主義的なりべラルな立場に立てると私は考えています。いろんな立場を見てきましたが、次に大塩の伝記に簡単に触れながら、私が今まで論じてきたことを裏付けたいと思います。

大塩平八郎の出生と成長

大塩平八郎は一七九三年、寛政の改革の三年後に大坂天満の寄力の子として生まれて、小さい時の名前は文の助、名は平八郎、正高、子起、土起、後素などと呼ばれ、号は中軒、中斎、連斎などと言われました。普通、大塩は一人の自然人として、官吏として、または乱の主人公としては平八郎、学者としては中斎と呼ばれております。

七歳の時にお父さんが亡くなって、八歳の時にはお母さんが亡くなり、その後は祖父に育てられました。十四歳の時におじいさんがやっていた寄力の見習いとなりますが、この寄力というのは世襲で禄高は二百石、大坂東町奉行所と西町奉行所にそれぞれ三十人づつの寄力がいて、その下に同心という役職が五十人ぐらいいたらしいです。ただ二百石という禄高を見たら、大した収入ではないかも知りませんが、実際は一千石以上の生活をしていたという話です。大塩の場合も、洗心洞という自分の家で始めた塾に大抵十五、六人の学生が生活を共にしていましたが、通ってる学生と併せると、多い時には六、七十人ぐらいいたんですから、相当の家だったと思います。大塩は賄賂なんか絶対に受けない官吏だったので、それでもそのぐらゐの余裕はあったようです。大塩は乱を起こす前に本を売

って貧しい人に配ったんですけど、五万冊を持っていたと言われています。五万冊とはすごい本です。もちろん儒学の本一冊というのは二、三ページで一巻というものもありますけれども、近世においては万巻の蔵書なら一応その学者はすごい本を持っているということになりますので、大塩の蔵書も大したものです。とにかく寄力という職は少ない禄高のわりに権力がすごかったということです。

三段階の転機

大塩は十五歳の時に家譜を見て、「功名気節」を持つのが第一の転機でして、自分の家系が今川の家臣であり、徳川家康の見てる前で敵将の首を切って、家康から弓を貰ったとかいった記録を見ながら、「自分はでたらめな人間になってはいけない、一人の侍として立派にならぬば」と思い、乗馬とか武術を一所懸命習うことになります。その後二十歳の頃、他の寄力や同心達の不勉強で不道徳な生活を見て第二の転機をむかえ、学問に専念することになります。そして二十四歳の時に呂坤という中国明時代の学者の『呻吟語』という本を読んで、陽明学に専念することになります。これが第三の転機です。しかしこの呂坤という人は陽明学者ではないんですが、一般的に明時代の思想家はいくら朱子学を主張しても、

それは陽明学を通った朱子学ということになり、そういう意味で心学的ないろんな内容が含まれています。特にこの『呻吟語』という本は病氣と戦う記録ですが、それは育体的な病氣ではなく、心の病氣を直すという、道徳的な自己克服の訓話なのです。だからこれは大塩に陽明学として理解されたのです。

大塩平八郎はなんでも王陽明の真似をしようと云ったらちよっとおかしいかも知りませんけど、王陽明も学問的に三段階の変化過程をへていきます。初めは仏教の禪に夢中になったんですけれども、ある日、これは世を去って生活を無視し、父母も兄弟も自分の子供も責任を取らない非人間的な教えであるとして、朱子学に転ずるんです。で、朱子が一事一理、一物一理、全ての世の中の物には一つの理がある、人間事にも必ず理があると主張するので、まず物の理を把握するために、友達と竹の前で何日か禅をする姿勢で窮理するんです。そして「竹の理とは何か」と一所懸命になるんですが、友達がその次の朝に倒れるんです。それでも「この人は身体が弱いから仕様ががない。私はやる」と言っただけで続けるのですが、三日目には自分も半死の状態になって、やっと「朱子学は嘘だ。こんなこといくらやっても仕様ががない」と悟って、それで自分の心学の開発にむかうんです。これが所謂王陽明の三変説になるんです。

そして大塩はある日琵琶湖に行った時、急に風雨が激しくなつて琵琶湖の波が激しくなつたので、船の中で何も考えずに帰太虚、太虚に戻って行つたと、そうするうちに風が止まって雨も止んでしまつたといひます。その時、ここに来る前に自分が講義した内容は全部真理でなかつたと後悔するんです。この話も王陽明が宦官との戦いで中国の西北の方に流れて行つた時、苛酷な自然や蛇などと戦つて苦勞しながら、結局、真理は心の中にあると急に自覚して良知の学を体得するという話と非常に似ています。

大塩の三つの功績

この三段階の転機を経て、大塩は二十五歳で洗心洞という塾を開きます。そして二十六歳の時に、橋本中兵衛の奥さんの妹「ゆう」と結婚し、三十三歳の時には洗心洞の「入学盟誓八条」を作りますが、当時の学生は十七、八人で門弟が約数十人おりました。三十八歳で寄力職を止めて教育に専念してからは、通つてる学生を合わせると門弟が五、六十人以上になります。

三十四歳に格之助を養子に入れてから四年間、大塩は官吏として三つの功績をあげます。まずその第一は、大塩は東町奉行所で勤めたんですが、西町奉行所に

人をおどしたりして賄賂を取る悪名高い寄力がいて、大塩はこの人を逮捕して自分の前で切腹させ、三千両の金を全部没収して貧民たちに配るといふ仕事をやつてのけます。その時は妻のゆうを本家に帰らせるんですね。もし失敗したらどうなるかわからない恐い相手だったからです。二番目の功績は、大坂・堺・京都・奈良のお寺のお坊さんたちの生活があんまり乱れていて、中には妾を十二、三人も持っている人がいたりして、まったく目茶苦茶な状態だったようですが、それを浄化して行くんです。これは江戸まで報告されて、名寄力の評判を得るきっかけになったのです。もう一つは、水野某という占師が仏教書のような本の上に十字架を付けたりして占いをしていたんですが、「あんたは何かしないと来年死ぬよ」という方法で人を威かしてすごい金を儲けていたのです。大塩はその水野某を逮捕し、処罰して第三の功績をあげます。

大塩の乱

その間、三十六歳の一八二八年には、洗心洞で王陽明三百周年追悼式を挙げますが、三十八歳で寄力職を辞任して、教育と学問に専念します。この年、中江藤樹の書院を訪問したら、その書院があんまりさびれていたので、金を集めて再建

したりします。藤樹書院には大塩が書いた跋文が保存されているんですけど、その字は乱の檄文と違って、日本の儒学者の中でも抜群と言えるくらいの名筆です。その後毎年、大塩は藤樹書院に行っています。跋文にも書いてるように、彼は藤樹先生がいなかったら、自分は良知の学である陽明学を理解することができなかつたとして藤樹先生を尊崇します。

その年の七月に大坂・京都に地震があり、九月には淀川の大洪水があつて、諸国が凶作にみまわれ、農民一揆が始まるんです。これは所謂一八三四年から三七年まで続く天保の大飢饉の前兆です。一七二〇年代の享保の大飢饉、一七八〇年代の天明の大飢饉、その後五十年毎にはまた大飢饉が来るんだということでも、一八三〇年になると不安が広がり、伊勢神宮に御蔭参りに参加する人が何十万人にもものぼるといふ状態になっていくんです。とにかく一七二〇年代から大塩平八郎の乱が起こる一八三七年までの日本の人口は全然増えていないんです。天明の大飢饉の時は、当時二千五百万の人口のうち百二十五万の人が死んで行ったと言います。

そしていよいよ大塩の乱にむかうんですが、天保の大飢饉に際して、大塩はまず貧民救済策の進言を行ないます。しかしそれが受け入れられないのを見て、反

乱の決心を固めるのですが、そこで先に申し上げました通り、自分の持っている本五万冊を売って、一人一朱づつ、計一万人に配ったと言う話です。と同時に家で鉄砲や火薬を作り、弟子たちに砲術を教えながら乱の準備にかかります。そして天保八年（一八三七）二月十九日、長文の檄文をかかげて立ち上がり、人々の決起を促しながら、大坂中に火を放ちますが結局失敗に終わります。そこで仕方なく大塩は一旦大坂を逃れますが、一週間の後、大坂に戻って来て、美吉屋五郎兵衛の裏屋みたいな所に隠れるのです。しかし、その奥さんが毎日朝夕「仏様に差し上げるんだ」と言って持って行く御飯や味噌汁がきれいになくなるのを不審に思った女中が、自分の本家に行ってその話をしたのが大坂城代まで流れてしまうのです。そして、三月二十六日の夜の十二時過ぎに、大坂東町奉行所の兵がやって来るのですが、それを知って大塩はその家に火を付けて切腹して死んじゃうんです。それで大塩は一生を終えるんです。

大塩の著書

ここで大塩の主要著書を紹介しながら彼の学問と思想を簡単に説明しておこうと思います。まず『洗心洞割記』ですが、これは洗心洞の講義録で大塩思想の決

定版と言われます。そして一八三三年、退職して三年目に出す『儒門空虚聚語』は、所謂「空」と「虚」の概念が仏教から来た言葉だとかそうじゃないとかいう論争が宋時代からあったんですけど、大塩は中国に仏教が入った大体AD二世紀以前の儒学の本を調べあげて、「空」あるいは「虚」という言葉を使った文章を取り出してまとめたものです。九十三人ぐらゐの儒学者を挙げながら八、九十人の説を集めたものです。次に『古本大学刮目』というのは、朱子の「新本大学」に反対した王陽明の古本大学論に従う一種の「大学」解説書です。新本と古本の違う点は、まず「大学」の初めにある「親民」という言葉の解釈にあります。朱子はこの「親」を「新」と読んで「改める」という意味で解釈するのです。これは結局権力者の言うことを「はい、はい」と聞くような国民に改めるということになるんです。しかし王陽明は、この語句をそのまま「民を親しむ」と読んで、朱子学的な上下主従の身分秩序に対抗する四民平等の理論を展開します。徳川時代の官学であった朱子学に対して、陽明学は民学であったと言われる理由も根源的にはこのポイントにあります。特に徳川時代には朱子の人間観に不信感を抱く人が多く、安藤昌益のように、「聖人というものは、人間を支配者・被支配者に分けた悪人である」と断言して、支配者と被支配者を分けた以前に戻って行くべ

きである、というアナキズム的な思想家も出てくるんですけど、陽明学はもと「民を親しむ」という立場をとり、そこから政治思想の重要なポイントが始まるんです。『古本大学』には勿論、「格物致知」のことも論じていますが、重要なポイントは「親民論」にあります。その他にも、『儒門空虚聚語附録』、前に話した「檄文」、「手紙」、「詩文」、そして親孝行の「孝」に関する講義等いろいろあります。

大塩思想の五つの特徴

大塩は自分の思想には五つの特徴があると言っていますが、その第一が「帰太虚」ということです。太虚に戻っていく、これは王陽明の『伝習録』では出てこない言葉です。第二に「致良知」ですが、これは良知と太虚を結合させるところに成立すると言っています。これは中江藤樹から始まる日本陽明学の特徴の一つで、宗教的な「上帝」の概念と結びつけています。第三は「気質の変化」、大塩の言ってる気質とは、朱子学で言ってる「本然の性」に対する「気質の性」と違うんですね。朱子学でいう去人欲というのは、人間の気質を悪の根源と見て、それを除去するということになるんですが、大塩はそんな見方は誤りであるという

のです。第四は「生死の一体」、すなわち理と氣の一体から始めて、個人と社会、私とあなた、それに塾の教育目標の文武一体を含めて、全てを一体化する、それは一言で言ったら、陽明学の一番重要な特徴である「万物一体」の仁になります。ですから人の苦しみを私の苦しみとして感じる、だから反乱まで行かなくちゃならないことになるのです。最後に「虚偽を去る」ということになるんですけど、これは主に官吏たちが賄賂を貰ったりするのを見て、虚偽の問題を発見し、それを去るべきだと言うのです。大塩自身、自分の思想の特徴を以上のように言うし、この原則を自分の生活に徹底的に適用して行ったのです。

氣の哲学としての陽明学

陽明学の知行合一、万物一体論、親民論、それに陽明の良知と張載の太虚論の混合という話はすでに言いましたので、氣の哲学としての陽明学ということを中心に説明しておきたいと思えます。まず朱子学では心を「性」と「情」に分けて、性を理、情を氣とみるんですが、陽明は性と情に分けないで、一本と見るんですね。それで心即ち理ということになるんですが、陽明においては理という言葉は二次的概念で、そんなに重要な意味を持たないんです。そして陽明の場合は、こ

の心の本体は良知であると言います。この良知というのは、西洋哲学でいうベルグソンのエラン・ビタールとか、現象学のインテンションナリティとか、そういう概念とすごく似ているような感じがします。何故かというところ、陽明学は知的な論理的な構造じゃないんです。これは飽くまでもインスピレーション、直観的な認識論に基づいているのです。だから「良知」というのは、そういう意味でベルグソンのエラン・ビタールのように生命のダイナミックなエナジーとみることができると思います。要するに良知は「元氣」あるいは「本源氣」のようなものだと私は思うんです。

日本陽明学の特徴

日本に本当に朱子学があったかどうかという論争が最近あって、東京大学の渡辺浩教授は、徳川時代の侍は国民の八パーセントから十二パーセントぐらいで、その侍のわずか一パーセントぐらいが四書の「大学」とか「孟子」とか「中庸」とかを理解したに過ぎなかったもので、江戸時代を朱子学の時代と呼ぶのはとんでもない話だといっています。また溝口さんは、本当に日本に陽明学があったか、そして大塩平八郎の言っていることはほんとの意味で陽明学であるか、という疑問

を提起しています。しかし私が思いますには、王陽明が言ったそのままを言ったとしたら、それは日本の思想ではないと言うことになります。

日本の儒学者たちの本を韓国の儒学関係の本と比べて見ると、体系として不備なところが沢山出てくるんですが、私はそうした自分なりにいい加減に言っているところに、クリエイティブ・ウェイ・オブ・シンキング、独創的で日本的な思想があると思います。そしてそれが日本思想史の強点だと私は思います。そういう面で、日本の思想史はいろんな日本的な展開があり、大塩平八郎も中江藤樹も勿論陽明学者ですけど、本当の意味での陽明学であったかどうかというようなことは問う必要がないと思います。

知行合一というのも一種の認識論で、「この花はきれい」と言う時の「きれい」という意識は即アクションに結び付くという考え方なのです。すなわち「このニオイは臭い」という認識と、「臭い」という意識のアクションとは分けることができないう認識論なのです。しかし、日本では言葉にしたのはかならず行動に移すべきだという言行一致の意味でつかわれる場合が多いようです。陽明学の認識論でみたらちよっとおかしい話になるかも知りませんが、それは陽明学の日本的な受容展開であるとしたら良いと思います。そういう面で日本の陽明学はや

っぱり日本的な特徴をもつと、私は思います。

おわりに

結論的に大塩平八郎の乱は、陽明学の知行合一、万物一体の仁、人の苦しみを私の苦しみとして感じるという思想を、官吏として教育者として学者として徹底的に生活の中で実践していった当然の結果だと思えます。朱子学は静かに窮理するのですが、陽明学は実践窮行になる。「行」が無かったら、それは幾ら聖人の言葉を覚えて科擧にパスしても、一生知識を集めるだけで聖人になり得ない。これは陸象山が朱子にしかけた論争ですが、「あんたは一生勉強して知識だけいくら覚えても、決して聖人にはなれない」という論理です。ですから陽明学の本質は、実践窮行、知行合一にあって、常に心をカルティベートして最善のところまで行かなければならないのです。学問をするプロセスそれ自体が行動を共にしないと意味がないというのが、朱子学と違うところでは。そういう学問内容を持つてる陽明学者の大塩平八郎を、思想家としてではなく、精神病の犠牲者といったような見方で思想と行動を別のものとして研究していく方法には問題があると私は思います。

***** 発表を終えて *****

外国人が、日本の思想史を研究するには言葉の問題から始め、いろんな面で限界がある。それも特定分野に関する日本での研究成果をあつめて問題点を検討するというのはとてもことで、ある意味ではなまいきな行動になるかも知れない。

ここで発表したのは、本人が1982年の博士論文で提起した argument と、その後出た論文集等を私なりに検討した一つの試論にすぎない。

もともと思想と行動、理論と実際の乖離問題は東洋でも西洋でも知識人を悩まして来た、なかなか解決できない問題である。しかし、「ある歴史を知るためには、その歴史を記録した歴史家を知らなくてはならないし、その歴史家を知らするためには、その歴史家が生きた時代を知らなくてはならない。」という E. H. Carr の話をこの大塩の研究に適用すると、彼の思想と行動を別のもものとして取り扱う仕事はとてもおかしいことだと私は思う。

ここで発表したのを、また print するという話を聞いて一層こわくはざかしい気持ちになるけれど、日本の研究者達に大きくしかられる覚悟で小さい声で隠れて O. K. とする。

송 휘 칠

日 文 研 フ ォ ー ラ ム 開 催 一 覧

回	年 月 日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」
⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」

⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6. 13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7. 11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9. 12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑭	元. 10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元. 11. 14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑮	元. 12. 12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」

19	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士 －戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
24	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇 －文化伝統からの一考察－」
25	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10.9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. Fatthy 「義経文学とエジプトのベールス王伝説に おける主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研 客員助教授) Karel Fiala 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2. 12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー 東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. Dolin 「ソビエットの日本文学翻訳事情 ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研 究員) Wybe P. Kuitert 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」

○は報告書 既刊

非売品

発行日 1991年3月29日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区御陵大枝山町3-2

電話 (075) 335-2222

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1991 国際日本文化研究センター

■ 日時

1988年6月14日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

